# 延慶本平家物語の接続詞

菅原範夫

目次

はじめに
一、延慶本平家物語の接続詞概要
二、和文語と漢文訓読語の分布
おわりに

## はじめに

山田孝雄博士は、平家物語の文章は「所謂和漢混淆文の上乗なるものとして人口に膾炙するものなるが、そのよく漢語を用ゐて国文に調和せしめたる技倆はわが文章史上に於ける偉観なり」と言われ、平家物語の文章を次のように分類された。(1)

○主として五七調または対句であやなした「地の文」
○当時の談話語を描写した「詞」
○平曲家の所謂読み物、即ち当時の「往来の文」

○和歌、歌謡、朗詠等の「謡ひ物」

このうち、「詞」は当時の口頭語を含むこと、「往来の文」は漢文で書かれており、漢文訓読そのものであること、「謡ひ物」は和歌等韻文であること、などから和漢混淆文とは「地の文」の特性であると考えられるのである。

和漢混淆文についてのこのような考え方に対して、前田富祺氏は覚一本平家物語について、要所に漢語を使い、対句的な表現を繰り返して実際以上に漢文の影響が感じられる部分、七五調のきわめて流麗な和文体、促音便・擬態語・俗語を取り入れた生き生きした文体等、その場面に応じて文体を変えており、「地の文」とても単純に一つの文体ということはできないとされる。(2) 前田氏のこの考え方は「地の文」をトータルで見るのではなくして、部分部分の調子を尊重しようという態度であると推測される。平家物語全体にこの考え方を導入すると、先の山田博士の四分類も更に小さく分類されうるということになる。

本稿は、延慶本平家物語において接続詞に着目し、その用いられ方から右の各種の文体がどのように関連しているのかを考察する。その結果から和漢混淆ということについても触れたいと考える。接続詞に着目するのは、接続詞が文章の枠組的な働きをするということ、また、和文語、漢文訓読語ともにかなり明確に指摘できること、それによって和漢混淆文の性格の解明に役立つという築島裕博士の指摘によるものである。(3)

## 一、延慶本平家物語の接続詞概要

接続詞の認定については、副詞、感動詞との弁別やどこまで複合語を認めるか等、個々の用例においては揺れが生じるところである。本稿では『品詞別日本文法講座』第六巻の「接続詞および接続詞的語彙一覧」にならい、(4) 接続詞的なものを含めて考えていきたい。従って、山田孝雄博士の『平家物語の語法』で扱っておられるものとは一致しない部分がある。

さて、右の立場から延慶本平家物語の接続詞を抜き出すと、次に掲げる九一語の接続詞が認められる。(5) これらの接続詞がどのような意味的機能において用いられているか分類して掲げる。本文では多く漢字で表記されているが、片仮名表記に直して掲げ、各語の下に用例数を添える。

〈累加〉一〇語

オヨビ2　カツ1　カツウハ27　カツウハマタ5　コレノミナラズ11　シカノミナラズ16　シカモ9　ソノウヘ28　ソレニ16　ソレノミナラズ1

〈並列〉六語

カネテハマタ8　ナラビニ55　マタ268　マタハ8　モシハ7　モシマタ4

〈選択〉三語

アルイハ6　アルイハマタ2　ハタマタ4

〈転換〉七語

ココニ47　ココニモッテ2　ソモ1　ソモソモ103　ソレ20　ソレモッテ1　モシソレ1

〈順接〉四六語

イカントナラバ1　イカントナレバ2　カカリケルアヒダ3　カカリケルトコロニ1　カカリケレバ28　カカリシアヒダ1　カカリシカバ8　カカリシホドニ5　カカルアヒダ2　カカルトコロニ1　カカルホドニ2　カクシテ2　カクスルホドニ1　カクテ32　ココニオイテ2　ココニオイテハ1　ココニモッテ2　ココヲモッテ10　コレニヨッテ60　コレヲモッテ4　サテ121　サテコソ16　サテハ18　サテモ38　サラデハ1　サラバ70　サラムニトリテハ4　サルニツケテモ2　サルホドニ93　サアルホドニ2　サルママニハ6　サレバ181　サレバコソ7　サレバニヤ11　シカシテ2　シカシテヨリコノカタ2　シカラズハ1　シカラバ7

シカルアヒダ16　シカレバ18　シカレバスナハチ14　シタガヒテ3　スナハチ43　モッテ9　ユヱニ21　ヨッテ52

〈逆接〉一九語

カカリケレドモ5　サハアレドモ2　サリケレドモ3　サリトテ4　サリトテハ6　サリトテモ2　サリトモ37　サリナガラ3　サリナガラモ4　サルニテモ15　サレド1　サレドモ78　サレバトテ16　シカリトイヘドモ14　シカルニ67　シカルヲ30　シカレドモ17　シカハアレドモ1　タダシ93

六分類の異なり語数を見ると、累加、並列、選択、転換の各類においては異なり語数が少ない。七〇パーセント以上が順接、逆接の意味のものである。

また、漢文訓続語か、和文語かの別と、延べ語数とをあわせて見ると次表のようになる。

**第一表**（注、和文語には○印を、漢文訓読語には◆印を付ける）(6)

| 意味／回数 | ～50 | ～40 | ～30 | ～20 | ～10 | ～5 | ～1 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 累加 | | | | ○ソノウヘ<br>◆カツウハ | ○コレノミナラズ<br>○ソレニ<br>◆シカノミナラズ | ◆カツウハマタ<br>◆シカモ | ○1<br>◆2 |
| 並列 | ○マタ<br>◆ナラビニ | | | | | ○マタハ<br>○モシハ<br>◆カネテハマタ | ○1 |
| 選択 | | | | | | ◆アルイハ | ◆2 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 転換 | ◆ソモソモ | ◆ココニ | | ◆ソレ | | ○カカリシカバ<br>○カカリシホドニ<br>○サルママニハ<br>○サレバコソ<br>◆シカラバ<br>◆モッテ |
| 順接 | ○サテ<br>○サラバ<br>○サルホドニ<br>○サレバ<br>◆コレニヨッテ<br>◆ヨッテ | ◆スナハチ | ○カクテ<br>○サテモ | ○カカリケレバ<br>◆ユエニ | ○サテコソ<br>○サテハ<br>○サレバニヤ<br>◆ココヲモッテ<br>◆シカルアヒダ<br>◆シカレバ<br>◆シカレバスナハチ | ○12<br>◆10 |
| 逆接 | ○サレドモ<br>◆シカルニ<br>◆タダシ | | ○サリトモ | ◆シカルヲ | ○サルニテモ<br>○サレバトテ<br>◆シカリトイヘドモ<br>◆シカレドモ | ○カカリケレドモ<br>○サリトテハ<br>○7<br>◆1 |
| | ◆4 | | | | | |

これによると、累加、選択、並列、転換の各類は漢文訓読語が多くを占めており、逆に順接・逆接では和文語が多い。また、順接、逆接の各類の語の約半数は使用回数の少ない語である。五回以上用いられている語は語形を掲げたが、主として働いているのはこれらで、全体的に見れば和文語二六語、漢文訓読語二五語の両者ほぼ同数の五〇語ほどということになろう。

## 二、和文語と漢文訓読語の分布

さて、これらの接続詞がどのような文章ジャンルに用いられるか検討していく。まず、最も典型的なものが「往来の文」とされたものである。これは本書においては漢文で書かれており表記面でも特別である。

①牒、今月廿日牒状、同廿一日到来。披閲之処、悲喜相交。如何者、互ニ可伏調達之魔障。抑清盛入道者、平氏之糟糠、武家之塵芥也。祖父正盛、仕ニテ蔵人五位之家ニ、執(トル)ニ諸国受領之鞭ヲ。大蔵卿為房、賀州刺史(シシ)之古へ、捕検非違所、修理大夫顕季(アキスヘ)、為播磨大守ノ之昔、任厩別当職。而且于親父忠盛朝臣、聴昇殿之時、都鄙老少、皆惜蓬壺之瑕瑾、内外英豪、各泣ニク馬台之籤文(シンモン)ニ。……惜名之青侍、無臨コト其家ニ。而ニ去シ平治元年、……其孫彼甥、悉ク割竹符ヲ、加之、統領シ九州ヲ、……亦雖云ニ公卿ト搦之。是以若ハ為延カ一旦之身命ヲ、……可問其罪也。然而或ハ相量神慮、……（二中　三井寺ヨリ山門南都ヘ牒状送事）

右の例は興福寺から三井寺への返牒である。この部分における「如何者（イカントナラバ）」「抑（ソモソモ）」「而且（シカルヲ）」「而ニ（シカルニ）」「加之（シカノミナラズ）」「是以（コレヲモッテ）」「然而（シカレドモ）」の諸語は記録語として指摘されているものであって、一定の漢字表記がなされているものである。

次は厳島神社に奉ぜられた願文である。

②件願文ハ御真文トゾ聞ヘシ。其御願文云。

蓋シ聞ク……一ニ陰一ニ陽之風旁ニ扇ク。夫伊ニ都ニ岐ニ嶋ノ社者、……楽フ閑ニ放於射山ノ之居ニ、而ヲ偸ニ抽テ、一心之精ニ誠、……専当ル季夏初秋之候ニ、而ル間、病痾忽ニ侵シ、……深ク知ル機縁ノ之不コトヲ浅ニカラ。抑朝ニ祈ル之客ク匪一ニ、暮ニ賽(カヘリ申シスル)之者ノ且(チ、ハカリナリ)千(セン)。但尊貴ノ之帰ニ敬雖多ニト、……（二末　新院厳島ヘ御幸事付願文アソバス事）

これにも、「夫（ソレ）」「而ヲ（シカルヲ）」「而ル間（シカルアヒダ）」「抑（ソモソモ）」「但（タダシ）」と、牒状同様の接続詞が見られる。これら諸種の文章と引用漢文を含むことを表すために「文書」とする。このほかには「ココニ」「コレニヨッテ」「シカレバ」「ユヱニ」「ヨッテ」等記録語、漢文訓読語が多く認められる。皆無ではないが、「サリ」系の語は極めて用例が少なく、当然のことではあるが、「文書」の文章における接続詞の際立った様相を見せているのである。徹底した用法は接続詞の偏りの一方の指標となるものである。

続いて地の文を見るが、地の文の中には次のような特徴的な文章がある。

③抑四天王寺ト申ス者、天下第一之奥-区、人-間無-双之浄刹也。……都鄙ノ之類ヒ、詣テ、道場-ニ、以テ鳩集ス。加之、天披帝葉ノ之廻ス輿-輦-ヲ、……詣ル人ト悉ク行ス念-仏-ヲ。依之、現世ニハ滅シテ三毒七難之不祥-ヲ、……又本朝ノ諸寺諸山炎上之例、是レ多シ。而ニ於当寺-ニ者、臨テ濁世-ニ、王臣之帰依弥ヨ新ニ、……（二本　天王寺地形目出事）

右は四天王寺の由来を説明する文章であるが、冒頭を「抑（ソモソモ）」で言い始めるという特徴を持つ。更には漢文訓読的性格が強く、接続詞も「以テ（モッテ）」「加之（シカノミナラズ）」「依之（コレニヨッテ）」「而ニ（シカルニ）」等、漢文訓読語が多く見られる。文書の文章よりも少しは和文的な表現を含み、「サレバ」等はある程度の用例数を持っている。地の文の中でも一類をなすものである。これを「由来説明文」とする。

④去々年小松内府被薨-ヌ、今年又入道相国被失-ヌルニハ、平家ノ運尽ヌル事顕レタリ。然ハ年来恩顧ノ輩ノ外、走付者更ナシ。猿程ニ去年、諸国合戦、諸寺諸山ノ破滅モサル事ニテ、春夏ノ炎旱ヲヒタ、シク、秋冬大風洪水打連、僅ニ雖致ト東作之勤-ヲ、西収ノ業如シ無-カ。カ、リケレハ天下飢饉シテ多ク及餓死-ニ。カクテ今年モ暮ニキ。明年ハサリトモ立直ル事モヤト思シ程ニ、今年又疫病サヘ打副テ、餓死病死ル者数ヲ不知、死人如砂。サレバ事宜キサマシタル人々、躰ヲヤツシ、……（三本　頼朝与隆義合戦事）

例文④は、通常の地の文である。「然ハ（シカレバ）」に続いて「猿程ニ（サルホドニ）」が用いられ、後には「カカリケレバ」「カクテ」「サリトモ」「サレバ」と重ねられ、和文語の接続詞の中に漢文訓読語のそれが交え用いられている様子が分かる。「由来説明文」との違いには明白なものが認められる。例文中には無いが、この類には和文語の「サテ」「サテモ」や漢文訓読語の「ココニ」「タダシ」等多様な接続詞が用例数多く用いられている。

⑤「……イツカハ丞相ノ位ニ昇リ、不次ノ賞ニ預リタリシ。而ヲ此一門代々朝敵ヲ追討シテ、四海ニ逆浪ヲ鎮ル事ハ

無双ノ忠ナレドモ、面々ノ恩賞ニ於テハ、傍若無人トモ申ツベシ。サレバ、聖徳太子ノ十七ケ条ノ憲法ニハ『人皆有心。心各有執。彼是我非、我是彼非。是非之理、誰能可定。相共ニ賢愚ナリ。如環無端。是以、彼人雖嗔、還恐我失ヲ』トコソ候へ。依之、君事ノ次ヲ以テ、奇怪也ト思召ン事ハ、尤理ニテコソ候へ。然而御運尽サル歟ニ依テ、此事既ニ顕レテ、被仰合候人々、加様ニ被召置候ヌ。……」（一末　重盛父教訓事）

例文⑤は平重盛の言葉で、父清盛を教訓している部分である。聖徳太子の十七条憲法を引用しながらの、父に対する切々とした言葉である。この中にある「而ヲ（シカルヲ）」「依之（コレニヨッテ）」「然而（シカレドモ）」等の接続詞は引用漢文中にある「是以（ココヲモッテ）」と同質のものとして伝わる。ただ、「サレバ」など和文的な接続詞も一部含んでおり、その面で口語的な姿を見せている。同類のものに奏上の言葉があるが、また、天皇の仰せも次例のように同質と見られる。

⑥主上仰ノ有ケルハ「不論遠近親疎ヲ、民ノ愁ヲハナダメハヤトコソ思召トモ、叡聞ノ及ハヌハ定テ多カルラム。深ク恵ヲ施サハヤト思召也。而ニ某ト云本所ノ衆アリ。依テ家貧ニ、衆ノ交リ難叶之間、既ニ其ノ身ヲ可失ト聞召トモ、『明主有私、人以金石珠玉。無私、人以官職事業』ト云事モアレハ、何カハ苦シカルヘキ。但世ニ披露セム事在憚。只僧正給ワス躰ニモテナスヘシ。御祈ハ長日ノ御修法ニ過タル事、不可有」ト被仰下ケレハ、（三本　青井ト云女内へ被召事付新院民ヲアワレミ給事）

このほか、命令、託宣等も同様で、通常の会話文とは性格を異にする。これらは特殊な緊張を含むことから、「緊張会話文」として一類を立てる必要がある。

通常の会話文は

⑦僧都ニ又「熊野詣ノ事ハイカニ」ト云ケレトモ、僧都猶伴ハサリケレハ、「サラハ二人詣テム」トテ、可裁替浄衣モナケレハ、麻ノ衣ヲ身ニマトヒテ、（一末　康頼油黄嶋ニ熊野ヲ祝奉事）

のように「サラバ」や「サレド」を中心としての和文語が多く認められるのである。

以上、具体的例文を見て来、特徴的ないくつかの点を指摘した。その中では和歌等を除いて三種五類の文章が認められ、それぞれの特徴を述べてきたところである。各類にどういう接続詞がどれだけ用いられているか、一覧したのが次頁からの表である。一見して和文語、漢文訓読語が分かるように、和文語に○印を、漢文訓読語に◆印を付す。(7)

この表から看取される全体的な特徴は次のようである。まず、「文書」は先述したように、言語的性格が最も単純である。全体的な用例も、和文語は皆無ではないが異なり語数、延べ語数共に極めて少ない。漢文訓読語で統一されていると言えるであろう。その意味で一方の指標となるものである。また、意味分野でみると、累加、並列、転換等の語や、順接、逆接では「コレニヨッテ」「ヨッテ」「シカルニ」「シカレバスナハチ」「スナハチ」「シカルヲ」「タダシ」等が多いことが指摘され、「文書」の特徴である。

この「文書」に最も近い姿を呈するのが「由来説明文」である。分量はさほど多くはないが、冒頭の「ソモソモ」を顕著な例として、その他の接続詞も漢文訓読語に偏る。例文③にもあるように、漢語を多く用いて荘重な表現にしている事が窺われ、「文書」の文章にならっていると言える。

「由来説明文」に次いで漢文訓読語が多いのは、「緊張会話文」である。「ソモソモ」「サラバ」「サレバ」「サリトモ」「タダシ」の諸語は「緊張会話文」での用例が最も多い。また、逆接の語も多く、これは事の本質を述べ、事態を様々に解析し、理を尽くして自己の意見を述べる、「緊張会話文」の特性がよく窺えるものである。このほか「ソレ」「シカモ」や「シカリトイヘドモ」「シカルヲ」「シカレドモ」「シカレバ」等の漢文訓読語は一〇例に満たないものの「地の文」の「通常文」と同等かあるいは多く、言語量から見ると頻用されていることが指摘される。しかし、先の「サラバ」「サレバ」に「サリトモ」「サレドモ」を加えた諸語は、これも多くの用例を持つものである。このように和文語をも多く持っていることは「文書」や「由来説明文」と大きく異なる所である。他に注目されるのは、「サルニテモ」の多用である。

第二表

| | 文書 | 地の文 由来 | 地の文 通常 | 会話文 緊張 | 会話文 通常 |
|---|---|---|---|---|---|
| 累加 | | | | | |
| ◆オヨビ | | 二 | | | |
| ◆カツ | 一 | | | | |
| ◆カツウハ | 五 | | 二 | 一八 | 二 |
| ◆カツウハマタ | | | 一 | 四 | |
| ○コレノミナラズ | | | 一一 | | |
| ◆シカノミナラズ | 八 | 二 | 四 | 二 | |
| ◆シカモ | 一 | | 四 | 四 | |
| ○ソノウヘ | 一 | | 七 | 一六 | 四 |
| ○ソレニ | 一 | | 四 | 一一 | |
| ○ソレノミナラズ | | | 一 | | |
| 並列 | | | | | |
| ◆カネテハマタ | 七 | | | 一 | |
| ◆ナラビニ | 一八 | 二 | 二八 | 七 | |
| ○マタ | 二一 | 二二 | 一五 | 九四 | 一六 |
| ○マタハ | | | 六 | 二 | |
| ○モシハ | | | 一 | 六 | |
| ○モシマタ | | | | 四 | |

| | 文書 | 地の文 由来 | 地の文 通常 | 会話文 緊張 | 会話文 通常 |
|---|---|---|---|---|---|
| 選択 | | | | | |
| ◆アルイハ | | 一 | 四 | 一 | |
| ◆アルイハマタ | | | 二 | | |
| ◆ハタマタ | 一 | | 一 | 二 | |
| 転換 | | | | | |
| ◆ココニ | 一一 | 八 | 二一 | 七 | |
| ◆ココニモッテ | 一 | | 一 | | |
| ◆ソモ | | | 一 | | |
| ◆ソモソモ | 一七 | 三二 | 一四 | 三九 | 一 |
| ◆ソレ | 一一 | 二 | 二 | 五 | |
| ◆ソレモッテ | 一 | | | | |
| ◆モシソレ | 一 | | | | |
| 順接 | | | | | |
| ◆イカントナラバ | 一 | | | | |
| ◆イカントナレバ | 一 | | 一 | | |
| ○カカリケルアヒダ | | | 三 | | |
| ○カカリケルトコロニ | | | 一 | | |
| ○カカリケレバ | | 一 | 二七 | | |
| ○カカリシアヒダ | | | 一 | | |

（接　順）

| | 文書 | 地の文 由来 | 地の文 通常 | 会話文 緊張 | 会話文 通常 |
|---|---|---|---|---|---|
| ○カカリシカバ | | | 六 | 一 | 一 |
| ○カカリシホドニ | | | 五 | | |
| ○カカルアヒダ | 一 | | 一 | | |
| ○カカルトコロニ | | | 一 | | |
| ○カカルホドニ | | | 二 | | |
| ○カクシテ | | | 一 | | 一 |
| ○カクスルホドニ | | | | | |
| ○カクテ | | 二 | 二七 | 二 | 一 |
| ◆ココニオイテ | 二 | | | | |
| ◆ココニオイテハ | | | | 一 | |
| ◆ココニモッテ | 一 | | 一 | | |
| ◆ココヲモッテ | 八 | 一 | | 二 | |
| ◆コレニヨッテ | 二〇 | 七 | 二七 | 六 | |
| ◆コレヲモッテ | 一 | 二 | | 一 | |
| ○サテ | | 五 | 八六 | 二三 | 七 |
| ○サテコソ | | 一 | 一三 | 一 | 一 |

| | 文書 | 地の文 由来 | 地の文 通常 | 会話文 緊張 | 会話文 通常 |
|---|---|---|---|---|---|
| ○サテハ | | 一 | 二 | 一一 | 四 |
| ○サテモ | | 三 | 二五 | 七 | 三 |
| ○サラデハ | | | | 一 | |
| ○サラバ | 一 | | 二 | 四二 | 二五 |
| ○サラムニトリテハ | | | | 三 | 一 |
| ○サルニツケテモ | | | | 二 | |
| ○サルホドニ | 三 | 一 | 八八 | 一 | |
| ○サアルホドニ | | | 二 | | |
| ○サルママニハ | | | 六 | | |
| ○サレバ | 一 | 一一 | 七〇 | 九一 | 八 |
| ○サレバコソ | | | | 五 | 二 |
| ○サレバニヤ | | 二 | 八 | 一 | |
| ◆シカシテ | 一 | | | 一 | |
| ◆シカシテヨリコノカタ | 一 | 一 | | | |
| ◆シカラズハ | | | 一 | | |
| ◆シカラバ | 四 | 一 | 一 | 一 | |

| | | 文書 | 地の文 由来 | 地の文 通常 | 会話文 緊張 | 会話文 通常 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| (順接) | ◆シカルアヒダ | 七 | 一 | 六 | 二 | |
| | ◆シカレバ | 六 | 二 | 三 | 七 | |
| | ◆シカレバスナハチ | 一三 | | | 一 | |
| | ◆シタガヒテ | 二 | | 一 | | |
| | ◆スナハチ | 一二 | 九 | 一一 | 一一 | |
| | ◆モッテ | 六 | 一 | 二 | | |
| | ◆ユヱニ | 八 | 四 | 五 | 五 | |
| | ◆ヨッテ | 三七 | | 一〇 | 五 | |
| 逆接 | ○カカリケレドモ | | | 五 | | |
| | ○サハアレドモ | | | 一 | 一 | |
| | ○サリケレドモ | | | 三 | | |
| | ○サリトテ | | | 二 | 一 | 一 |
| | ○サリトテハ | | | 一 | 三 | 二 |
| | ○サリトテモ | | | | 二 | |
| | ○サリトモ | 一 | 一 | | 三〇 | 五 |
| | ○サリナガラ | | 一 | | 二 | |

| | | 文書 | 地の文 由来 | 地の文 通常 | 会話文 緊張 | 会話文 通常 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | ○サリナガラモ | | | 一 | 三 | |
| | ○サルニテモ | | | | 八 | 七 |
| | ○サレド | | | 一 | | |
| | ○サレドモ | 一 | 四 | 五一 | 一八 | 四 |
| | ○サレバトテ | 一 | | 四 | 一一 | |
| | ◆シカリトイヘドモ | 三 | 二 | 五 | 四 | |
| | ◆シカルニ | 二八 | 一 | 二二 | 一六 | |
| | ◆シカルヲ | 一二 | 六 | 五 | 七 | |
| | ◆シカレドモ | 三 | 一 | 五 | 八 | |
| | ◆シカハアレドモ | | | | 一 | |
| | ◆タダシ | 二五 | 三 | 一三 | 四九 | 三 |

「サルニテモ」は小林芳規博士によって、会話文にのみ見られる口頭語であることが指摘されている。[8]「サルニテモ」が会話文の通常文に見られることは言うまでもないことであるが、このほかにも「サラバ」「サリトモ」「サレバコソ」等、会話文に集中するいくつかの語が通常文と共通して多用され、会話文としての基盤を形作っているようである。一方で極めて漢文訓読語的性格を見せるのではあるが、他方では会話文であることの色彩も濃いものである。

語の関連で「会話文」の「通常文」に目を向けると、「サテ」「サラバ」「サレバ」「サリトモ」「サルニテモ」等が中心的に用いられており漢文訓読語は極めて少なく、和文語の性格が最も濃いものと見られる。

「地の文」の「通常文」においては「サテ」「サルホドニ」がそれぞれ八〇余例、「サレバ」が七〇例程、「サレドモ」が五〇例、「カカリケレバ」「カクテ」が約三〇例と和文語のなかで特に用例の多いものが数語認められる。漢文訓読語にも「ナラビニ」二八例、「コレニヨッテ」二七例、「シカルニ」二二例、「ココニ」二一例と用例数の多いものもなくはないが、「サテ」等の圧倒的な用例数と比較すると少ないと言わざるを得ない。基調としては「サテ」等にあると考えられ、和文的性格が強いとみえるのである。これに漢文訓読語を交えているのである。また、この類での特徴の一つは、「カカリ」系の接続詞の異なり語が多い事である。漢文訓読語でもなく、さりとて会話には用いられないこれらは、「地の文」の「通常文」に特徴的であり、その意味でも独自なものである。

会話文に用いられない「コレノミナラズ」「モッテ」や、「緊張会話文」が先述のように文語的性格を持っているとすると、「会話文」の「通常文」に用いられていない「カツウハマタ」「シカノミナラズ」「シカモ」「ソレニ」「ナラビニ」「マタハ」「アルイハ」「ココニ」「ソモソモ」「ソレ」「ココヲモッテ」「コレニヨッテ」「サレバニヤ」「シカラバ」「シカルアヒダ」「シカレバ」「スナハチ」「ユヱニ」「ヨッテ」「サレバトテ」「シカリトイヘドモ」「シカルニ」「シカルヲ」「シカレドモ」等は和文語・漢文訓読語の枠をこえて文語の性格の強いものである。

## おわりに

延慶本平家物語の接続詞について山田孝雄博士の分類を基本としての諸種の文章における特徴を見て来た。「由来説明文」の漢文訓読的性格が「文書」の表現に立脚していることは明らかであろう。「緊張会話文」についても、改まった表現が漢文的になることは一般的にも言えることではあるが、同一文献内で相接している「文書」の表現との緊密さが、「緊張会話文」に具体的表現効果を生じさせているものと思われる。この二者は「文書」の表現に近いことに意義があるのである。「緊張会話文」は一方で基底としては「会話文」の「通常文」と通じており、口語性もある。「地の文」の「通常文」は和文の基調の上に立って、漢文訓読的性格を合わせ持つ。接続詞を殆ど持たないということから表示していないが、その意味で和歌等は特徴的である。短い文章であることがその理由と考えられる。山田孝雄博士の分類のみを表面的に見れば互いの関係が不明確であるが、接続詞に焦点を当ててみると互いに緊密に連関しあっているのである。そこにおいては、分量は少ないながら「文書」を基底とする漢文訓読語の役割は小さくないものが認められる。地の文において和漢混淆を見ることは勿論であるが、延慶本平家物語を一つの文章とすれば、ここで見た五類の文章においても「漢」の印象は強いものがある。接続詞から見て、持たないことでも特徴的な和歌等[9]が和文の典型とすれば、延慶本平家物語はこれらの持つ特性を効果的に組み合わせて成立しているのである。「漢」は緊張を伴う表現に用いられ、その意味での和漢混淆も見逃せないところである。[10]

### 注

(1) 岩波文庫『平家物語』解説（昭4・3、本稿では昭和36年版によった。）

(2) 「古代の文体」（『講座国語史』6　大修館書店　昭47・2）

(3)『平安時代の漢文訓読語につきての研究』第一章第三節など（東京大学出版会　一九六三・3）
(4) 青木伶子氏作成。（明治書院　昭48・5）
(5) 本文は、北原保雄　小川栄一編『延慶本平家物語』（勉誠社　平2・6）による。
(6) 注3文献、峰岸明『平安時代古記録の国語学的研究』第三部第二章（東京大学出版会　一九八六・2）や、接続詞についての文献での指摘に基づく。その他は推定による。
(7) 注6に同じ。
(8)「鎌倉時代の口頭語の研究資料について」（『鎌倉時代語研究』第十一輯　武蔵野書院　昭63・8）
(9) 和歌の用例としては、「ヨシサラハ去年モ今年モサカスシテ花ノカワリニ我ソ散ヌル」（四、安楽寺由来事付霊験無双事）「サリトモト思フ心モ虫ノ音モヨワリハテヌル秋ノユフクレ」（四、尾形三郎平家於九国中ヲ追出事）を見るのみである。
(10) 三角洋一氏は「とはずがたり」の文体について、「大きくは和文体、漢文体ないし漢文訓読体、和漢混淆文体のそれぞれを念頭に置いた文章、あるいはこれと次元に異にして、願文・表白文とか起請文とか辞状とか遺戒・教訓とか訴陳状とかいった文書形式に由来する文章など、多様なものが見られると思う。」（「『とはずがたり』の文体」（『中世文学』三六　平3））と指摘し、これらを駆使して明晰でのびやかな文体としていると主張している。諸種の文体に意味を持たせて利用しているという考えである。

［補記］　本稿の骨子は平成四年度春季広島大学国語国文学会で口頭発表した。御教示いただいた室山敏昭先生、位藤邦生氏に感謝の意を表する。